田中春夫先生追悼

せっかちにけ駆け抜けた田中先生

鰻 目 信 三*

田中先生のお姿を初めて拝見したのは 1963 年の第 14 回国際電波科学連合東京総会か，またこの頃盛んだった宇宙理学共同利用研究所構想をめぐる天文学将来計画の議論の場だったかと思う．因みに当時の天文学研連将来計画小委員会は委員長が海野先生で幹事が古在先生であった．1963 年の 11 月に畑中先生が亡くなられ，沢山抱えておられた役職をどなたにお願いするかを三鷹の天体電波の小屋で関係者が集まって話合っていた．大学院生であった私もその場に居合わせ，今は大阪学院大におられる守山さんが電波科学研究連絡委員会Ｖ分科（電波天文）の委員長に田中先生を推されたのを記憶している．藤田先生から空電研究所で仕事をするように勧められ，1966 年 2 月に初めて豊川を訪問して，田中先生に直接お目に掛かった．柿沼先生が物静かに話されるのと対照的にせっかちにあれこれ聞かれたり，自分からいったりされて，時折甲高い声で笑われたりして，これが大学教授なのかと妙に面食らった．歓迎の飲物に解放感を味わいたいと感じた時，背丈程の草の中に一筋の行き止まりの道を，海軍工廠の焼け残りの建物の所長室の窓越しに，指さされ，これは大変な所だと思った．その年の 4 月から豊川で私は働くことになった．この頃田中先生は退官された金原先生の後をついで所長になられたばかりで，初めて空電研究所に特別設備費を獲得される等されて，大変張り切っておられた．3750 MHz の電波干渉計に「電波太陽活動指数計」と名付けられ，東京天文台とは違った特色を出すことに苦心されていたが，私は何も知らずに，変な名前だなと単純に考えたりしていた．ややあって，空電研究所の本館が新設され，電子計算機が入ったり，太陽風部門（第 6 部門）が出来たりして，豊川まで高度経済成長の波が寄せて来た感じがしたものだった．今思い返して見ると，田中所長がこの時期にされた努力と獲得した成果に追加されるものは，その後の空電研究所に有っただろうか，という気がしてならない．しばらくして，所長をやめられ，研究室で顔を突き合わせるようになり，日常のつきあいが多くなった．良く飲んでは議論した．楽しい話題では皆愉快に酔うことが出来た．しかし，いつも楽しい訳ではなく，飲まなければ議論出来ない話題が出て来るようになり，こうしたことはおかしいと，私は反発したが，田中先生は黙っておられた．何年か経過して答えは聞くことが出来たと私は理解している．人事の難しさを良く知っておられると感心した．混沌の中から形ある物を作ることにたけていることが知られるようになり，あれこれの役職を引き受けられ，難局を乗り切って幾多の成功を納められた．宇宙電波懇談会／大型宇宙電波望遠鏡計画／野辺山宇宙電波観測所は最もうまく行った例で，この他国際太陽地球観視事業，C2-世界資料センター，電波科学研究連絡委員会での活動等も田中先生の幾つかの個性－楽天的，計画的，サービス精神，柔軟性，国際的等々なしには，考えられない．学問的にもこうした性格は生かされていて，長期に亘る太陽電波強度観測／絶対較正，干渉計の開発／改良等も大変個性的である．東京天文台へ移られて空電研究所と併任されていたころはさすがの田中先生も困る局面があり，何度か呼ばれて議論に参加したことがあった．こうした場面でも若い者の発言によく耳を傾けて，柔軟な考えを示されたり，自らの誤りを正されたりじた．こうした点は大いに学ぶべき事と自戒している．しかし，それでも空電研究所を辞められたころは，前後の事情を御理解頂けなく，しばらくつらい思いをした．所で，すべてがうまく行った訳ではなく，田中先生でも解けない難問が幾つか残っている．大型太陽電波写真儀計画と空電研究所将来計画が最大のもので，これらについては亡くなられるまで頭を悩まされていて，筆者も度々叱咤激励をうけた．日本学術会議会員として天文学，電波科学，宇宙空間科学等の分野で，広い立場から田中先生に活躍して頂けると思っていた矢先に，亡くなられて，残念でならない．田中先生は初期の日本の電波天文学の歴史について英文，和文で書いておられるが，多少のお手伝いをした身として，今更ながら用意周到という思いがする．今，もし「なんてまたせっかちな」と問いかけることが出来たとしても，「早くしろよ！ ぼやぼやしてるんなら，さっさと死んじまえ！」と怒鳴る声が聞こえてきそうだ．

（本稿は天文月報 1986 年 3 月号に掲載されるべく，それに間に合うように筆者から発送されましたが，編集係へ届きませんでした．手違いの段，関係各位にお詫びします．天文月報編集係）

* 名古屋大学空電研究所 Shinzo Enome